Fairy Tale

真辺よっぴー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Ｆａｉｒｙ Ｔａｌｅ

【Ｎコード】

Ｎ５０１０Ｉ

【作者名】

真辺よっぴー

【あらすじ】

自分で作成したオリジナルの詩をまとめてみました。

何気なく見ていただけますと、非常に嬉しいです。

そこはおとぎの国

＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー
＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー
＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー

ふと気が付くと
そこはトビラの前

ぼんやりとした
瞼擦りながら
そっと手を触れる

子供のような
大人にも似た僕のカラダ

成長しきっていないココロは
置いてゆくんだ

無邪気さが大切な荷物
1つだけ背負い込んで
僕は今旅立つよ

It's a wonderland

＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー
＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー
＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー＊ー

風の向かう場所

晴れた日に雨が降るのは
おかしいことだろう？
僕らは当たり前のことをして
笑顔になっていればいい
それが生きること

強くたっていいけど
弱くたっていいんだ
その２つがあるから
人は人でいられる
支え合って生きていけるんだ

だから

風の向かう方へ
走り出してみようよ
きっといつもより速く
走れるはずだから
君も連れてゆくよ
目指す場所は同じ場所

もし風が風邪を引いたら
おかしいことだろう？
不自然さを
無理になくそうとしないで

ただ歩いていけばいい
それが生きること

泣いたっていいけど
怒ってもいいんだ
その2つがあるから
人は素直になれる
悲しみを越えて
生きていけるんだ

だから

風の向かう方へ
走り出してみようよ
ずっといつもより遠く
走れるはずだから
君も一緒に行けるよ
走る速さは同じ速さ

明日を見つめる時間は
君のためにある
僕の出来ることは
明日を一緒に目指すこと

だから
見つけに行こう

だから

風の向かう方へ
走り出してみようよ
きっといつもより速く
走れるはずだから
君も連れてゆくよ
目指す場所は同じ場所
きっと同じ場所

砂漠と雪

ひび割れた友情　卵のように脆くて
不器用に生きてく自信はないけれど
無機質で乾いた世界　踏みしめた地面はばらばらで
全てを壊したいと思った

何かが違う、と
呟いてはまた歩き出すような無力感
この世界に雪が降り積もったら
歩き出した私の足跡も
風化しないで残り続けるのだろうか

砂漠に枯れない花を置いていこう
あなたが種をまくその姿は
私の目には映らない
目の前を向くしか出来ない私の姿は
あなたの目にはどう映っているのだろう

荒れ果てた心変わり　吹きすさぶ嵐のようで
不器用な言葉に紡いだ「さようなら」
無機質で乾いた世界に　冷たい雪粒ぱらぱらと
全てを冷やして固めてく

何もかも無駄、と
呟いてはまた立ち止まるような期待感
この世界が雪で覆われたら
立ち止まった私の足元を

あなたのために残してくれるのだろうか

全てに負けない心を育てよう
あなたが種をまくその姿は
私の目には映らない
目の前には雪も残らない砂漠の姿が
私の目の涙を乾かすように揺れている

恋吹雪（れんふぶき）

「浅はかでした。」
呟いた涙は戻らない。
今日も降り続ける。
あなたへと吹きすさぶ未練　冷たい恋慕。

会いに行くふりをして
傷つけた愛しさは　なれの果て
拾い集めても
目に見えるのはぞんざいな愛の証

消えるように響く鈴虫の音色
もうすぐ本当の雪が降り積もる
心の中は深い真っ白な愛の偽者
闇に消えるあの日の影とあなたについた嘘

「愛は終わったの。」
綺麗な愛は続かない。
昨日から振りやまない。
空白になった溝に溜まる　あなたへの恋慕。

抱きしめる振りをして
不意に止まったあなたの腕
そこに愛はなくても
目の前にいるのは気まぐれな愛の形

寂寞を混ぜ合わせた秋の空
間もなく絡みつく闇に生まれ変わる
心の中の戸惑いに隠された嘘の文字
闇に消えるあなたの唇と触れられないぬくもり

「さよなら。」は言った。
別れるなんて言ってない。
明日からあなたはいない。
二度と溶けることはない　永遠の恋慕。

「愛は終わったの。」
呟いた涙は戻らない。
今日も降り続ける。
あなたへと吹きすさぶ最後の未練　恋慕。

泪の後ろ姿

雨止まぬ秋の夕暮れ
忘れ去られたように
郵便受けに入っていたのは
くたびれた一枚の手紙

「ずっと忘れてたはずだったのに……」
そんな嘘の言葉を並べても
遠く離れた心の在りかは
すがる場所を見つけられずに
ただ崩れ落ちてゆく

失うことは大人になるにつれ
失う意味を遠ざけてゆく
そんな間違いに気付いた
会いたい気持ちは
今も胸に残っているのだと

君を忘れていた過去の中
みすかされたように響く
見覚えのある1文字1文字
整った手紙の言葉

「あなたはまだ覚えていますか？」
問いかける君の気持ちの狭間に
揺れ動いた心の扉

鍵の在りかは見つけているけど
雨に流され錆び付いてゆく

途切れることなく揺れる想いよ
繋げることで近づけていた
そんな当たり前に気付いた
会いたい想いは
今も君と繋がっているのだと

強がりに心が流されても
雨はただただ降り続ける
心の在りかを
忘れさせてくれるように……

それはまるで
脆弱な自分を映した
涙のかけらと後悔の滴

君と、僕と蛇

あなたのようになりたい、と
君は、僕に言った。
しがらみにも負けない、
乾いた、ココロ、響く。

「欲しいものは見つかった？」
僕は、あんまり、ないけれど。
だから、羨ましい。
今の僕は、満たされてるのかな？

声は、響かないけど、
この道の先、光が見える。
それは僕が、見つけたもので、
君が僕に、言ってくれたもの。
なんにもないけれど、
今、僕は目的を見つけた。
君と、僕と、２つのつながり。

あなたのように強くないけれど、
君は、僕につぶやいた。
自由なココロはいつも、
気持ち、柔らかく、なでる。

「自由って何もないこと？」
僕は、それなら、ツマラナイ。
だから、羨ましい。

今の君は、僕より自由だよ。
選択、出来る余地、
何よりも自由だと、僕は思う。
それは君が、できることで、
僕には、多分、選べないこと。
なんにもないからさ、
でも、僕は目的を見つけた。
君と、僕と、２つのつながり。

あの光の向こう、
何があるのかな。
僕は、気にしてなかったけど、
今、君が教えてくれたから、
僕は探してみる、自由なこと。

声は、響かないけど、
この道の先、光が見える。
それは僕が、見ていたもので、
君が僕に、指さしてくれたもの。
なんにもないけれど、
今、僕は目的を見つけた。
君と、僕が、見つけたつながり。

君は君、僕は蛇。

空のブランコ

あの空の彼方の遊び場所
この手が届くようにと願ったのは子供の頃
今は大人になって
近くに在るのは現実の眼差し

「後ろめたいことって何？」　君と昔の僕が
振り向きながら僕に囁く
いつから僕は僕を追い越して行ったのだろう
君から教えられて　はっと気付く

空のブランコ
背中に羽がついてるように
空を駆け抜けるよ
ずっと思い描いてた自分
今からもう一度追いつけるかな

「2人だけの宝物だよ」と
君と家の庭に埋めた子供の頃のあのガラクタ
今は大人になって
近くにあるのは要らないものばかり

何もかも捨てきれなくて持て余す昔の僕が
あふれる夢のバトンを僕に託す
いつから僕は走ることをやめたのだろう
自分の居場所ばかり気にしてた

空のブランコ
風に乗って走りだすように
空を駆け抜けるよ
ずっと欲しかった宝物
今からもう一度手に入るかな

小さかった頃の夢をノートに描いてみる
1ページも埋まることがないまま
鉛筆の芯が折れる
そうだ　事実なんて必要ない
ノートを破り捨てて
僕はまた走り出すよ

空のブランコ
背中に羽がついてるように
空を駆け抜けるよ
ずっと探してた夢の切れ端
今からもう一度探しに行くよ

君とあの空を駆け抜けてさ

ポップコーン・わたあめ

色とりどりの海を浮かべると
空に溶けたあの夏の思い出は
小石にはじかれたように
ぽつぽつと散っていった

あざやかな青空を浮かべたら
海に溶けたこの胸の想い出は
白波に飲まれるように
しんしんと沈んでいった

太陽にはじかれたカケラを
そっとなめてみたら
ゆるくて　切ない　甘い季節の香りがした

あぁ　もうすぐ夏が終わるんだね

君に逢えたら　また
「さよなら……」なんてね
それはきっと口の中で
音を立てずに消えていった言葉なんだけど
思い出は殻の中に閉じ込めたまま

君と別れても　また
「会いに来るから……」
それはきっと口の中で

噛み締めて飲み込んだ言葉なんだけど
想い出は胸の中にしまったまま

花火がぱちぱちと割れるように
寂しさもぬくもりさえも
甘くて苦いまま
心の奥に届いては消えてゆくけれど
優しさと強さ
ようやく混ざり合って
はじけて　溶けて
溶けて　はじけて
「おもい」が重なってゆく

また　この季節が過ぎてゆくよ

海に浮かぶ街

さざ波がつぶやくかすかな言葉は
ささやくように奏でる澄んだ音色
流れる雲だと思ってつかんだ夢の一粒は
白波の中に眠る僕の記憶

ゆりかごは必要ないよ
だってこんなにも世界は揺れ動いているのだから

真っ白な月に蒼い絵の具を持ちだした
そうさ　そこは海の中
漂う僕は儚く脆い泥のよう
海の中には輝く虹色のオーロラ
太陽の溢した涙かな

波音がゆらめくゆるい浮遊感
ダイヤのように散りばめられた泡色
深海の闇にまぎれる途切れ途切れの砂粒は
蒼色の世界にある僕のかけら

受け皿は必要ないよ
だってこんなにも世界は広がっているのだから

真っ黒な岩に形のない道を描いてみた
そうさ　そこは海の底
足をつく僕は不安定に泳ぐ魚のよう
海の中には流れる虹色の貝殻

月からの贈り物と目印

海に浮かぶ必要ないよ
だってこんなにも世界は近くにあるのだから

真っ白な月に蒼い絵具を持ちだした
そうさ　そこは海の中
漂う僕は儚く脆い泥のよう
海の中には輝く虹色のオーロラ
太陽の溢した涙かな

秋笑顔

靴擦れした足の軽く踏みしめた隙間から
ゆるりとふわり
秋のにおい
かすかに冷たい手を引く僕に
君はほてった顔を傾げて小さなため息

自由な鳥
弧を描き
遠く霞む山々を結びつけるよ
君と僕も
あんなふうに飛べたらいいのにな
二人の手をつなぐ風そよぐ道
赤い羽根
ひらひら舞い落ちて重なってゆく

「1つだけ言いたいことがあるよ」
そんな言葉を奥に押し込んだまま
僕は黙って再び手を引いた
ゆるんだ頬
君が小さく笑うよ
その笑顔が何よりも何よりも素敵だね
まだ言い出せずに歩き出す
やわらかな淡い想い
落ち葉のように揺れていた

軽く汗ばんだ
手のひらの優しいぬくもりは
君の鼓動か
僕の気持ち
やがて落ち着いた手を引く君は
僕の斜め前を
いつの間にか歩いてはしゃいでる

「あそこがいい」
「キレイだね」
木々と共に色付く言の葉
君の声
「いつまで経っても子供のままだね」
なんて
そんな言葉はすぐに出てくるくせに
大切な一言はまだ色付かないまま

ねぇ　君は気付いているのかな？
そんな気持ちを胸に隠したまま
僕は黙って君の瞳を見るよ
照れてはにかんだ小さなその顔
あぁ　やっぱり
何よりも何よりも素敵だな
勇気を出して伝えよう
ひらひらと赤い羽根
励ますように揺れていた

君を恋しいと思うこと

君を愛しいと思うこと
その想いは赤く染まってゆくから
どうか落ちないでこの言の葉よ
もう少し君に見てほしいから
もう少し君が笑顔でいますように

「1つだけ言いたいことがあるんだ」
色付き出した大事な言葉
僕は黙って君の手握りしめる
羽根は想い
風は言葉になって
その笑顔に
ゆっくりとゆっくりと届くんだ
「君が好き」たった1つのメッセージ
やわらかな秋の空に
響くように伝わってゆくよ

落ち葉ひらひら
握りしめた手の中に

月明かりに咲くひまわり

どうしてこんなにも心苦しいのでしょう
あなたに会える日に想いを馳(は)せては
沸き上がる感情　抑えきれず
今日もまた一人　月明かりに照らされています

まっすぐに上を見つめていますか？
何気ない問いに答えるものなど
どこにもいなくて
空を見るだけの私は
どんな色の花を咲かせようとしているのでしょう

少しずつ想いの根が伸びていきます
愛苦しさは明日への糧
もうどこにも行かないから
私はいつまでもここで待ち続けているのです
涙に濡れた花のつぼみも
想いのぬくもりに触れて　また輝き出すから

あれからどれくらいの月日が流れたのでしょう
あなたと会った日を思い出すけれど
記憶の花びら　はらり　散っていきます
明日もまた1枚　ぬくもり遠ざかっていくでしょう

あなたを好きな私はどこですか？
高く　空に近付き過ぎたのでしょうか？
足元　見えなくて

空を見るだけの私は
初めに抱いた花の色　思い出せずにいるのです

「あなたに会いたいよ」　一人つぶやきました
愛苦しさはもう届かない
もうどこにも行けないから
私は花を咲かすことしか出来ずに
無理に笑おうとしたつぼみ
想いの重さに耐えきれなくて　埋もれていきました

あなたを好きな私はどこですか？
最後にもう一度咲かせたいあなた色の私
月を見るだけの私は
あなたの目にどんな色を届けるのでしょう

降り注ぐ想いと淡き月の明かり
愛苦しさはもう生まれない
私はあなたを忘れてしまうのでしょう
私はあなたにもう届かないのでしょう
涙に濡れた花びらが今
二度と忘れることのない
違う色の私を咲かせていました

オワリナキデグチ

気が付けば歌ってた
想い
気が付けば変わることに
気が付いた自分

とどまることを知らずに
歩み目指したあの場所で
僕は自分を捕まえた
孤独は悲しみを持ちながら
決意を距離に変える

オワリナキ道の果てに
互い違いに行き交う
自分を見て何を思うのか？
流れ行く時間の中
行き違いにたどり着く
自分が見つけた
何かを知った

それは見知らぬ未来

なすがまま遠ざかってた
意識
あるがまま近くに行った
あるがままの気持ち

孤独を補うことで
歩み続けたその道のりで
僕は自分を補えた
前進は決意を踏みしめながら
孤独を今振り返る

オワリナキ道の果てに
分かち合えた自分から
手に入れたかけがえのない
戻せない時間の波
離れた先にたどり着く
自分が知り得る
何かを見つけた

それは出口のない扉

流れゆく永い時間の中で
すれ違う別れに傷付き
過ぎ行く自分に迷い続けた
それでも今
僕は扉を開いた

オワリナキ道の最後に
互い違いに離れゆく
あの自分はどこへ行くのだろう？
オワリユク決意の狭間に

行き違いにたどり着いた
この自分は今
始まりを告げる

そこは明日へと続く道

平らな道の中に　一筋の線がのびている
わたしの強がりは　その上に沿って並ぶ嘘の思い
不確かな思いの上に立った道しるべは
わたしの声が届くことなく　崩れ去っていく

街の交差点の人ごみの中で　ふと足を止める
「この足は、どこに向かっているんだろう」
みんなそう思っているのかな
立ち止まったわたしの頭に響く　誰のでもない言葉は
行動を始める合図の音を知らせない

気付かないふりはしてるわけじゃないけれど
「立ち止まるもんか」
その言葉はわたしの腕をかすめてゆく
残った傷跡を見て　何を感じながら明日を生きるのだろう
願いも誓いも夢もすべて
胸の中に深くしまいこんで　わたしは再び歩き出すよ

あの空白の道は　わたしの覚えていない過去
未来への願いは　空白の存在に埋められてく
余っては削り取られていくこの言い訳は
わたしのか細い声の果てに　消えてくため息

流れ行く季節の変わり目に　ふと足を止める
「季節の始まりは、一体いつなんだろう」
いつの間にか過ぎてる今日

立ち止まったわたしの足元を　名もない風が通り過ぎる
明日が始まる合図の音を知らせずに

わかってるふりはしてないわけじゃないけれど
「立ち止まるもんか」
その言葉はわかったふりをするわたしの
明日を遠ざけていく
遠ざかる明日は　わたしに何を残してくれるのだろう
喜び　怒り　悲しみ　苦しみ
何１つ捨てることは出来ない　わたしはすべて持ってくよ

『不安』の底辺に存在する
かすかな『希望』
立ち止まらなければ気付かなかった『自分』
今　確かに拾い上げて
私は未来へと旅立つ

気付かないふりはしてるわけじゃないけれど
「立ち止まるもんか」
その言葉はわたしの腕を引っ張ってゆく
つながれた未来を見て　何を思いながら明日を過ごしていくのだろう
願いに閉ざされた希望が今
わたしの道に光を照らしながら　明日を飾っていくよ

そこが明日へと続く道

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5010i/

Fairy Tale

2010年10月14日14時46分発行